

国際人育成のための体験型英語教育

長森 清

村田学園小石川女子中学校・村田女子高等学校では、国際理解教育の一環として、体験型の英語学習プログラムを構築している。生徒たちは、中学1年生で大使館訪問、外務省訪問、総合的な学習を通して世界の中の日本を考える。中学2年生では、国内 English Camp に参加し英国の言語と文化を学ぶ。中学3年生では海外の有名人に手紙を書き、オーストラリア体験セットを利用しての疑似体験、そして10日間のオーストラリア海外研修に参加する。また、中学生の全学年を通して、週1回のALTによる英会話の授業を行っている。高校では、週1回CALL教室における授業展開を行い、また、今年度は、数研出版の *BIG DIPPER English Course 1* を採択したこともあり、国立極地研究所准教授 門倉昭氏をお招きして、トピックに関連した「南極」についての講演会を行った。ここで体験型の英語学習プログラムの一部を紹介する。

中学1年生

2009年度は、カナダ大使館の訪問を実施した。カナダ大使館を選んだ理由は、テロ対策や防犯などの理由から大使館は通常閉鎖的なところが多いが、カナダ大使館は見学ができるようになっていること、また、2008年は赤毛のアン生誕100年、2009年は日本とカナダ修好80周年、2010年はカナダ・バンクーバーにおいてオリンピック・パラリンピックまたG8サミットが開かれるなど、時世を得た国際理解が得られると考えたからである。訪問に先立ち、大使館より提供される事前学習用資料を参考に「カナダと日本」について簡単な事前学習を行った。カナダ大使館の訪問当日は、大使館職員によるガイドツアーで「カナダガーデン」、「高円宮記念ギャラリー」、「E. H. ノーマン図書館」を見学した。図書館は書籍だけでなくカナダの雑誌や新聞もあり、カナダ関連の資料に関してはアジア最大級の施設である。

その場で登録すれば自由に閲覧できる。そして最後の質疑応答を含め、全部で約1時間30分程度であった。カナダが身近に感じられ、生徒は本当にカナダに行った気分になっていた。

3か月後、本校に大使館員の方を招いて、「多文化の国カナダへようこそ」というテーマで講演をいただき、大使館で学んだことを膨らませた。改めて日本とは違う多文化主義を学ぶことができ、有意義な時間であった。

また、2010年度は世界の中の日本を考えることを目的として、外務省を職場訪問した。事前学習として、社会の時間を2時間使って、外務省からいただいた「外務省」、「名探偵コナン 外務省」、「外交という仕事」の資料とホームページを活用した。外務省訪問では、最初に、外務大臣や副大臣などの会見がテレビでよく放映される記者会見室において、この部屋や外務省のことについての説明がなされた。

その後、外務省内を案内していただき、ロビーに飾ってある外務大臣の外国訪問を写した「写真パネル」を見ながら、外務大臣や外務省の仕事、職員数や大使館数などの説明を受けた。また、世界における日本の窓口である外務省にふさわしく、日本の心を再認識し、日本文化に誇りをもてるよう、現代的な枯山水の様式で造られた「中庭」を見学した。続いて、「国際大会議室」を見学した。そこでは、国際会議の様子や同時通訳の行われ方などを学ぶことができた。そして最後に、生徒が考えてきた質問に職員の方がお答えくださった。生徒はどんなに大きい国際的な外交も、大切なことは相手に対して真剣に接することだと学んだ。普段は見ることのできない施設見学とあって、生徒たちには非常に充実した楽しい時間となった。

そして、世界における日本を考えるという「総合的な学習」を行った。具体的には、最寄り駅周辺の外国語の看板を探すことと、学校近くのスーパーに

ある輸入食品を探すこととした。これには合計6時間を要し、3日に分けて行った。目的は、街中にある英語の看板から英語を学ぶだけでなく、そこから読み取れる国際化についての謎を解き明かすことである。「何で」「なぜ」を感じ、自分の考えを発信する“know—why”を育成する。また、食品から日本と世界の食糧事情を考えることにより地球的視座で物事を考えられるようにし、今後の英語学習に活かすことをねらいとした。

1時間目は、実施するにあたっての目的を説明する。また、2班に分けて、班対抗として、どちらがより多くの英語・何か国からの輸入食品があるかを見つけられるかを競い、ゲーム性をもたせた。1班が最寄り駅周辺の英語の看板を探し、2班はスーパーにある輸入品を探し、そして時間で交代する形をとった。

2時間目は、考え・問いかける時間とした。駅周辺の英語の確認と輸入品の数を整理する時間をとった。班ごとに、なぜ駅に英語・中国語・韓国語の看板があったのかを考えた。また、スーパーでは何か国からの輸入食品があったか、日本は外国からどのくらい食料を輸入しているのか、外国から食料が輸入できなかったら日本はどうなるのかなどについても意見を出し合った。その後、なぜ英語が世界共通語になったのかを班で考え、英語を勉強する必要の是非を討議した。そして最後に、英語の路線図を配布して、生徒にどのような情報が書かれているかを考えさせた。そして日本語がわからない外国人の方にも、アルファベットと数字で駅名がわかるように工夫がなされているという新たな発見を見つけることができた。

3時間目からは、前もって宿題に出していたプレゼンテーションである。発表時間は2分と短めに設定した。まず初めに、「外国人を案内するとしたらどこを案内するか」「なぜそこを案内するのか」を発表した。4時間目は、外国の中で一番興味のある国を1つ挙げ、簡単に「興味をもっていること」「興味をもっている理由」を発表した。5時間目は、日本ができる国際貢献、また自分ができる国際貢献を発表した。3時間目から5時間目のいずれの発表も、教員が予想しなかった観点からのものが多く、生徒の個性が十分に発揮されていた。

6時間目は、今回の学習の感想と、今後の英語の

取り組みに対する決意と目標を書かせて終了とした。

中学2年生

2年生は3年生のオーストラリアの海外研修に備え、国内における2泊3日のEnglish Campを実施している。場所は福島県にある神田外語大学の施設British Hillsである。British Hillsはパスポートのいらない英国留学として、日本にいながらイギリスの文化・環境の中で国際人養成を目指すことのできる体験型の研修センターである。事前学習として、イギリスの歴史・風土・文化などの「調べ学習」を行い、その後、授業において自己紹介・家族紹介などの簡単な英語でのプレゼンテーションをし、英語で質疑応答を行う。これにより、「調べ学習」「発表」「グループ学習」を英語の科目に取り入れることができ、リサーチ・プレゼンテーション・ディスカッション能力の育成にもつながる。生徒たちが学ぶ姿勢が「与えられる学習」から「獲得するための学習」へと変化し、論理的な思考力をもつ女性＝「サイエンスレディ」へと成長していくことを目的としている。この英語でのプレゼンテーションは、3年生になっても引き続き行っていく。

British Hillsでは、Survival English, Fun with Language, Talk about Yourself, Home-stay English, British Sports, Cookingの計6レッスンを受講している。ホームステイに必要な英語を学ぶことはもちろん、ブリティッシュスポーツやスコーンを作るクッキングの授業を通して、イギリス文化理解にも努めている。また、夜の時間は、本校独自のプログラムとして、本校教員によるゲームを中心として楽しく学べる英語の授業を展開している。また、12月に実施していることもあり、クリスマスパーティーなども行う。2泊3日のEnglish Campは生徒に大好評で、その後の英語に対する意欲・関心がより高まり、授業に対する取り組み方が積極的になる。

一方で、中学3年生の4月に行く京都・奈良の修学旅行では、深く日本の歴史・風土・文化を再確認する。これらの経験が、国際理解を養うことにもつながると信じている。

中学3年生

3年生の1学期には、海外の有名人に手紙を書くということを行っている。この趣旨は、手紙の書き方を学ぶことと自分の英語が通じるかを試すことにある。準備するものは、国際返信切手券、便箋、A4の封筒2枚、切手200円程度、手紙を書きたい有名な候補複数(必ずしもその有名人が自宅の住所・事務所を公開しているとは限らないので)である。ある程度の英文の雛形はこちらで用意したものの、ライティングの指導は大変であった。しかし、生徒は自分の好きな人へ書けるとあって、やる気は十分にあった。返事が100%返ってくるとは限らないが、Meg Ryan, Johnny Depp, Orlando Bloom, Daniel Radcliffe, Emma Watson, ヨーロッパのプロサッカーチーム、さらにはなんとあのMickey Mouse等からも返事がきて、生徒からの反響は大きかった。

3年生2学期では、3月中旬に実施する、10日間のオーストラリア研修の事前学習を行っている。オーストラリアについて学び、異文化を理解することを目的として豪日交流基金が作成した、「オーストラリア体験セット」を活用している。その名の通り、見て、触って、体験できるのでとても有用であり、事前学習には最適であった。またそれに付随してビデオ教材「オーストラリア発見」とCD-ROM「エコ・オーストラリア発見 自然との共生」を必要に応じて活用した。

実際のオーストラリア研修では、ファームステイをしながらの語学研修と自然学習をメインにしている。その他のプログラムとして、先住民アボリジニーの文化の学習、現地の学校を訪問しての交流会、そして世界遺産キュランダやグレートバリアリーフの見学など内容は多彩である。この研修が、中学の国際人育成のための体験型英語教育の集大成である。高校においては希望者を募り、2週間のオーストラリア語学研修を実施している。

高校生

週1回のCALL教室の授業では、パソコンを使っているリスニング、英文法の演習、英語検定対策、センター試験対策、単語ドリル等ができるようになっている。授業時間の半分はパソコンを使い、残りの半分は従来の教室で行うような形で、教科書を使

っての授業をしている。CALL教室ではコンピュータを駆使して、普段とは違った授業展開をしなければならぬと感じがちだが、普通教室にプラスしてコンピュータがあり、普通教室ではできないことをコンピュータが可能にしてくれるという認識で、必要に応じて使っている。また、自学自習ができるので、一斉授業と違って個別の対応ができる。放課後は開放しているため、自主的に利用する生徒が増えるのは喜ばしいことである。CALL教室でのICT教育がこれからの英語教育に重要であり、それらの情報処理能力は国際人として欠かせないものと考え

2010年度は、高校2年生において*BIG DIPPER English Course I*のLesson 10 *Continent Without Borders*を読み学習した後、「キャリア講演会」と題して国立極地研究所准教授、第50次南極越冬隊長 門倉昭氏をお招きして講演会を催した。南極について、さまざまなデータをもとにお話いただき、南極でも温暖化が進んでいることを実感した。また、南極滞在中の貴重な画像とともに、南極での生活について、さまざまな興味深いお話をうかがうことで、より深く教科書を理解することができた。南極はこのレッスンのタイトルでもあるように、国境なき大陸であり、世界のさまざまな国が助け合いながら環境問題等に取り組んでいる。それはまさに国際協力であり、国際感覚を身につける絶好の機会となった。余談になるが、映画「南極料理人」の鑑賞もあわせて実施すると、南極の魅力にとりつかれる生徒もいる。映画というと、『ブルー・ゴールド：狙われた水の真実』では、世界で起きているさまざまな「水戦争」の現状をドキュメントしている。この映画は、Lesson 6 *Water of Life*の理解と生徒の国際的視野を広げるのに大変役立った。

2010年度は時間の関係で実施はできなかったが、Lesson 9 *Hana's Suitcase*の学習時には、ホロコースト教育資料センターと連携しての平和教育やハンナのかばんをお借りして、生徒にじかに触れさせることも考えている。これは、本校の高校2年生が修学旅行において長崎を訪れることもあり、事前学習としても最適である。同時に、平和を実感すること、また戦争の悲惨さを世界に発信することも国際人として必要なことと考えている。

今後の取り組み

2010年度は、中学校において「サイエンスレディ講演会」として、青山学院大学准教授 長谷川美貴先生に講演をしていただいた。この講演会では、社会で活躍されている女性研究者で、生徒たちに将来の目標としてほしい女性をお招きしている。長谷川先生は、2010年に発表された新しい元素「コベルニシウム」の命名に携わり、世界的に活躍されているということもあり、英語も堪能で、生徒たちの憧れの女性となり、先生の授業をまた聞きたいと好評を博した。高校においても「女性のためのキャリア講座」として、(株)マザーハウスの方に来ていただき、女性の生き方や、バングラデシュやネパールという「途上国から世界に通用するブランドをつくる」という国際ビジネスや発展途上国への社会貢献を学ぶことができた。来年度もこのような機会を設け、生徒に広い視野と国際感覚を身につけさせたいと考えている。

国際人育成のための体験型英語教育の試みは試行錯誤であるが、今後も英語教育の更なる充実を図っていくよう考えている。その取り組みの一つとして、CALL教室に多読用図書をレベル別そして系統的に完備する予定である。授業における英語多読を導入し、洋書を読む楽しさを体験させることを目標としている。

(村田学園小石川女子中学校・
村田女子高等学校教諭)